やさしい
# こころと経済学

## 第2章 倫理観・価値観と絆 3

慶応義塾大学教授　大垣　昌夫

人格を磨いて共同体に貢献することを善とする徳倫理の倫理観を用いると、危険ドラッグの規制が良い政策と判断されることを経済モデルで考えてみます。モデルから数値例をつくることで、多くの人々が持つ倫理観を基に、どんな社会や政策が望ましいかについて理解を深められます。

経済学では、財や余暇の組み合わせの好みを選好と呼びます。効用（満足度）がより高くなる組み合わせを人は好むと考えます。一般的な経済モデルの規範経済学の分析は、この選好を倫理的判断の尺度として用います。

危険ドラッグの場合、中毒モデルで分析をします。代表的なのは新古典派経済学の牙城である米シカゴ大学のゲーリー・ベッカーとケヴィン・マーフィーが発表した合理的中毒モデルです。

基礎的な経済モデルでは個人の選好は一つだけですが、中毒モデルでは過去にドラッグを使ったなどの条件により、現在のドラッグの効用が違ってきます。このため、個人は様々な「条件付き選好」を持つことになります。条件付き選好だと、物差しが変化してしまい、規範経済分析には使えません。

一方、人生のある時点でドラッグを使うと、その時点で効用が上がるだけでなく、その後の効用に影響があることも全て考慮した選好を「条件なし選好」と呼びます。こちらは物差しが変化しません。この選好を使い、規範経済学分析すると、「危険ドラッグを規制すべきではない」という結論になります。

著者と米ジェームズ・マディソン大学のヴィプル・バット、中央大学の矢口裕一との規範経済学の研究では、効用を高めることをよしとする厚生主義だけでなく、徳倫理も考慮するアプローチを提唱しています。中毒になっていない条件付き選好は、中毒になっている条件付き選好よりも望ましいというのが徳倫理です。この倫理観を使うと、合理的中毒モデルでも、「危険ドラッグを規制すべきだ」との結論になります。

## 経済モデルから考える



(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。